

巻頭言

希望をもって、仲間と一緒に明日へ向かいたい

代表理事 新津ふみ子

医療・福祉の現場の人たちが必死で“コロナ”対策に取り組んでいる姿を拝見しながら、私は毎日、デスクワークです。3月から地方への出張は中止、都内の事業所への訪問は3月中に数か所でした。自粛ではなく指示ですが、当然とは思いつつ、やっぱり残念でした。

一方で、大変恵まれていました。まず、当法人の中心的な事業である「福祉サービス第三者評価」は、2月で訪問調査はほぼ終了、報告書のまとめの時期になっていたからです。“コロナ”の感染拡大が、例えば10月頃だったら、評価は延期か中止になっていたからです。事業の進捗と収入に大きく影響を及ぼし、今頃はどうなっていたのでしょうか。このように恵まれている私たちですが、心が痛くなり、憂うつ・不安になり、耐えられるかと思うことがあります。

私は新宿に住み、事務所がある五反田まで、歩きと電車です。 “コロナ”以来、最近は歩く距離を長くしているので、街の様子・変化がよく目に入ります。3月に入り、あつという間に路上生活者の方たちが、新宿駅西口に増えていくのです。ポストンバッグなどの荷物の数を見ると、路上生活が長いのではないかとと思われる人もいますが、持ち物が少なく、明らかに先日まで仕事をしていたように見える人もいます。

緊急事態宣言を受けて、5月初めに東京都はネットカフェ生活者のためにビジネスホテルを確保しましたが、約1か月後、ホテル利用の中止を宣言しました。もしかしたら、そのあたりを受け、行き場がなくなった人たちが増えているのではないかと思います。新宿区でホテルを利用していた人の数は172名で、ホテル利用中止後の対応が不十分だったと報道されています。路上で生活を始めた人のなかには、ダンボールを敷いて座り、そこに茶碗のようなものを置きはじめ、お金の寄付を待っているようです。女性も見られるようになりました。

新宿駅西口だけではなく、路上生活者の姿と出会うことが多くなっています。私は、路上生活者に対する取り組み、制度について詳しくはありませんが、新宿区に住んで50年近くになるので、地域の特性から普通に気になっていました。新宿区は、多様な人々、そして他国・多国の人々が生活できる地域です。

東京では、バブル経済崩壊後の1990年半ばから、路上生活者支援が行われてきました。また、2000年代半ば以降は「ネットカフェ難民」とよばれる安定した住まいを喪失した生活困窮者(ハウジング・プア)の増加に伴い、路上生活に至る

前段階にある困窮者支援に取り組み、路上生活者の数は減ってきました。簡易宿泊所や自立支援センターも設置され、ネットカフェの数はわかりませんが、公園や路上でホームレスの方を見かけることが減っていました。仕事として、例えば、古本や缶の収集をしている人を見かけることがあり、収入を得ている姿がわかります。

そして今、“コロナ”対策として、路上生活者の人たちにも「特別定額給付金」10万円の支給がありますが、住民登録していないなどの理由で受け取りにくい状況が報道されています。私は、新宿の路上を歩きながら、「がんばって」と心の中でつぶやくだけですが、それも空しく、路上での生活状況を目にする「いつまで続くのか」と、見通しのなさに、憂うつが募ります。

こんなとき、歌手の長渕剛が希望の新曲『しゃくなげ色の空』を発表しました。“コロナ”の状況が悪化するなかで、必死の挑戦だったと感じました。長渕剛は、この曲づくりのプロセスで、旧知の医療従事者ら“仲間”に製作途中の曲を聞いてもらい、意見を求めています。そして日ごとに歌詞を変え、希望を探ることがむずかしいなかで、生死を共有する仲間たち、必死で生きる仲間たちの存在の大切さが身に染み、孤独じゃないと思えた、と語ります。ちなみに「しゃくなげ」の花言葉は「尊厳」で、自制しながら“コロナ”と闘う日本人の姿が重なったと語っています。

私は、当法人の事務局メンバーや仲間たちと一緒に頑張っているから、今があります。実は“コロナ”自粛が開始されてから、事務所内のその日のメンバーで昼食をとる機会ができました。新事務所には台所があり、鳥海事務局長が料理をしてくれるのです。これが最高に美味しいのです。栄養のバランスがよく、体力維持ができ、頑張れています。会議室で食事をしますが、幅広のテーブルで「密」は心配していません。また、会員からも手づくりのご馳走などが届いたり、連絡をいただいたり、会えなくても手を伸ばすとそこに仲間がいると感じました。“みんな大丈夫、元気だよ”。

7月から、第三者評価の事業所訪問が都内外ともに開始され、また、都外へのコンサルテーションも始まります。これからもよろしく願い致します。



長渕剛の希望の新曲『しゃくなげ色の空』の一部を紹介させていただきます。

♪手を伸ばすから 掴んで欲しい  
 さわって欲しい  
 抱きしめてほしい  
 ……………

君と生きて 君と死んで 君と生まれて  
 そして僕は ここに いるから♪

58号の  
 ガイド

- 1P: 巻頭言 希望をもって、仲間と一緒に明日へ向かいたい
- 2~4P: “新型コロナウイルス”への対応—医療・福祉のそれぞれの現場から
- 4P: 会員だより、次回内部研修会ご案内、ほか

◆『厚生福祉』第6562号(2020年4月10日発行)の巻頭言「障害者雇用促進法」を執筆者の齋藤芳雄さんからご提供いただきましたので会報に同封します。(編)

## 法人の運営モデルの“チェンジ”

認定NPO法人 シーズネット(北海道札幌市)  
代表 奥田龍人

新型コロナウイルスの感染は北海道が早かったため、2020年2月に北海道独自の緊急事態宣言が出されました。そして、4月には国の緊急事態宣言が相次いで、シニア層にはとても危険なウイルスということもあり、シニアのサークル、サロンをメインの活動とするシーズネットの活動も、ほぼ自粛を余儀なくされました。

外出を避けることなどが奨励されたため、フレイル(虚弱)になりつつある方もいるようで、とても心配しています。といっても、それを予防する効果的な支援がほとんどないのがこの感染症のもたらすやっかいな課題で、当法人も自宅にこもる高齢者のフレイルを予防する具体的な手立てはもっておりません。せいぜい、あまり人と交わらない外での散歩などを呼びかけているぐらいです。

また、財政的には、6月19日に全国的に自粛解除となりましたが、サークルはほぼ自粛している状況ですので、サークルの参加料収入(当法人の予算の20%)が激減することが見込まれます。さらに、会費収入も減収が見込まれます。会員数はほぼ900~1,000人で保っていますが、この間、若干減少傾向にあり、またコロナ禍による活動自粛のため退会する方も増えつつあって、この状況で新しく入会する方も増えていくとは思えません。この減収への対応をどうするかということも、当法人の継続にかかわる大きな課題です。

当法人の収益事業の柱になりつつある福祉サービス第三者評価事業も年初に6件の契約を結びましたが、やはりコロナ禍ですっかり止まっています。こちらは、施設の面会制限がまだ続きそうですので、評価の開始はしばらく後になるのではないかとみえています。

そのため、秋以降に支出の見直しをしなければなりません。ただ、運営はボランティアで担っているのが不幸中の幸いというか、人件費を削るといった厳しい選択をしなくてもよいのが、他の産業に比べてありがたいところではあります。

感染症予防はまだまだ長引くと予想していますので、これを機に「仲間づくり」をメインに「居場所づくり」と「役割づくり」を掲げてきたシーズネットの運営モデルを、少しずつチェンジしていこうと思っております。これからは、認定NPO法人という責務をもって市民への社会貢献活動を推進すべく「役割づくり」にシフトし、創始者である岩見太市さん(故人)が常日頃発信していた、さまざまな支え合いのための取り組みの実践を具現化していきたいと思っております。

## コロナ禍の障害児支援について

社会福祉法人クムレ 児童発達支援センター 倉敷学園  
園長 安 知子

全国で新型コロナウイルスに感染した事例が相次いで報告されるなか、当学園でも感染防止対策を講じてきました。3月の卒園式は、ご来賓の臨席を断念して、次のステージに羽ばたいていく27名の子どもたちだけの参加に式典の規模を縮小し、家庭的な雰囲気なかで送り出しました。4月に新入園児を迎えたあとも、緊急事態宣言の解除後、5月末までは行事も中止・縮小を余儀なくされていました。6月に入り、注意深く動向を見極めながら「withコロナ」の生活を模索しています。

このような状態になって、今さらながら、あたり前のようにできていた日々の生活の営みのありがたさを感じます。

通園は、幼児期の子どもたちの育ちと発達にとって重要な機会です。感染予防対策を確実に実行し、ご家族の協力を得ながら発達支援を行ってきました。学園内には医療ケア児や重症心身障害児も在籍し、ご家族にとっては厳しい状況下にありますが、地域の幼稚園、小・中・高校は臨時休業となったため、不

## 社会福祉法人クムレ 児童発達支援センター「倉敷学園」の紹介

児童発達支援センター「倉敷学園」は、何らかの障がいや発達の遅れのある子どもが利用する施設です。医療ケア児も受け入れており、定員は50名です。

倉敷学園は、岡山県倉敷市に所在し、「社会福祉法人クムレ」が経営しています。1978年に開園され、学園敷地内には、障がい者を対象にした生活介護、就労、放課後デイサービス、保育園等の事業所があり、地域交流拠点としてひろば栗の家があります。

安を感じるご家族のなかには、欠席を選択するご家庭もありました。

STAY HOME状態にある子どもたちや家族に向けた発達支援・家族支援として、職員がYouTuberになり、「うた、あつまり、クッキング」など、毎日1本の動画をYouTubeで配信しました。子どもたちは、緊急事態宣言の解除後、日々のYouTube配信のおかげで躊躇することなく元気に通園ができています。いつも以上に子どもたちの生活に寄り添いながら、特に健康を中心に日々の支援を丁寧に行ってきました。

学園の敷地内には、成人期支援を行う生活介護や就労があります。コロナ禍で、大人になってマスクを着用することが困難な利用者がいることに気づきました。うがい、手洗いと同様に、幼児期からマスクを着用し、予防をはかることも大切なことです。

この予防の取り組みを知った卒園児のお母さんから「マスクを寄贈したい」とのお話がありました。このお母さんは「さをり織り」を通じて、地域のなかで居場所を提供する事業を立ち上げられています。過敏なお子さんに考慮した、感触のよい、通気性も抜群な可愛いマスクを寄贈していただきました。子どもたちは喜んでマスクを着用し、通園しています。

コロナ禍で気づかされた健康のありがたさ、予防の大切さ、マスクでつながったご縁に感謝するとともに、前向きに知恵を出しあい、チャレンジしていくことの大切さを痛感しています。

地域の方と一緒に、5月末に例年どおり「田植え」を行いました。泥だらけになって楽しそうに田んぼに入る子どもたちの身体からは、いきいきとした強さが溢れています。

## コロナ禍による影響と大阪の地域包括支援センターの取り組み

大阪市内 地域包括支援センター  
相談員 安達美登

大阪市内の地域包括支援センターで社会福祉士として働き始めて5年目。相談員としてはまだまだ半人前ですが、新津代表からのリクエストに応え、コロナ禍による影響や取り組みについて報告させていただきます。

コロナ禍による影響と、それによってもたらされた課題として、①地域行事が中止となり、外出機会が減ることで、心身・認知面の機能低下が心配されること、②同居家族も気分転換の機会が減り、虐待のリスクが高まること、③地域で高齢者と出会う機会が減り、またケアマネジャーのテレワーク等により相談が減少したこと、④訪問した高齢者に発熱や風邪症状がみられたときに地域包括支援センターの職員としてどこまで対応するのかということがあり、今回はこの4点について、私たちの取り組みや対策について報告したいと思います。

まず、①の「心身・認知面の機能低下」については、大阪市内各区のさまざまな地域において住民主体で取り組んできた「いきいき百歳体操」「かみかみ百歳体操」「しゃきしゃき百歳体操」が、3月中旬から中止となってしまいました。その代替として「いきいき百歳体操」がケーブルテレビで放送されることになったので、チラシをケアマネジャーや高齢者に配布しています。

次に、②の「虐待のリスク」については、ケアマネジャーのモニタリ



ングで、本人の異変等に気づいてもらえるよう発信しています。

また、③の「相談の減少」については、大阪市や日本老年医学会等から出されているチラシや厚労省から配布されたマスクをコミュニケーションツールとして活用したり、民生委員等の地域支援者からの聞き取りを行っています。ただ、これからも地域行事の中止が続くことを考えると、広報・啓発活動のために、地域支援関係者とも相談しながら積極的に戸別訪問していく等、高齢者と接触できる機会をどうやって確保していくのか考えていかなければいけません

そして、④の「どこまで対応するか」については、訪問時には最低限の感染対策として携帯用手指消毒、マスク、フェイスシールド、手袋を準備しています。しかし、既往歴、かかりつけ医などの基本情報が全くない状況で訪問することも珍しくなく、支援してくれる親族がいなければ、救急搬送やPCR検査に付き添うことも必要になります。職員自身の感染リスクが高くなることを考えると、生活の場でどこまで対応しなければいけないのかと考えてしまいます。

6月から、ぼちぼち社会経済活動が始まりましたが、第2波、第3波を考えると慎重にならざるを得ません。一日も早い収束、そして大きな声で「乾杯！」と言える日を心待ちに、日々できることをコツコツしていきたいと思えます。

## コロナウイルス対応の最前線から

東京都 保健師 酒井由紀子

皆様いかがお過ごしでしょうか。この原稿を書いている最中に、東京も緊急事態宣言が解除になりました。COVID-19対策も新たなステージに入っているのを実感しています。コロナウイルスは冬風邪ウイルスともいわれ、秋冬の第2波に向けて、できる対策の構築が必要になっています。

改めて考えると、COVID-19は、2003年に中国の広東省を起源としたSARS、2012年に中東諸国から拡大したMARSなどと同様、コロナウイルスが引き起こす感染症です。

新型コロナウイルスは、遺伝子情報からSARSウイルスの仲間であり、原因ウイルス名は国際ウイルス分類学会において、SARS-CoV-2と命名されています。このSARS-CoV-2ウイルスは、閉ざされた空間での濃厚接触により感染者が増大しています。

効果的な治療薬やワクチンなどの予防薬がない現状では、感染リスクを高める行動を慎むことと、個々人それぞれが健康に留意して免疫力を高めること以外に、感染を阻止する手段がない状況です。感染症対策は、自分自身が感染を受けないこと、そして感染源にならないことが基本です。基本に忠実な行動、常に「相対する人は疑いがある」とみなして対応することに尽きるのです。以下は、都内保健所における対応です。

今回は、PCR検査が進まず、現場は本当に苦労しました。

当初は、発生届を受理すると、積極的疫学調査による濃厚接触者の洗い出しを丁寧に進めていくことで、ある程度の封じ込めはできていました。ところがその数が多くなるにつれ、どの保健所も次々に「しなくてはならないこと」に追いまくられ、現場は人海戦術でも整理が十分できないまま、新たな感染者への対応に追われ、必要最低限の対応にならざるを得ない状態になっていきました。

自分たち自身も、感染により業務の継続ができなくなることを防ぐために、あらゆる手段を講じて業務を進めながら、保健所は一日も休むことなく対応してきました。

業務の内容としては、電話相談、受診調整、積極的疫学調査、入院や施設の調整、患者搬送、患者や濃厚接触者の健康観察、PCR検査への対応等々、多岐にわたる対応が求められ、まさに戦場のようなありさまでした。

職員を集中化させるなど、さまざまに対応を工夫しながら、とりあえず乗り切ったというのが実感です。そのような状況のなかでも、他の感染症も発生し、結核やHIV等々への対応も実施し

ています。

まだまだ気を緩めることなく、自分たちの行動が明日につながることを肝に銘じながら、また皆様と元気にお会いできる日を楽しみにしています。

## 新型コロナウイルス対策をしながら事業を継続する施設の近況

社会福祉法人うら 特別養護老人ホーム みずべの苑(東京都)  
施設長 川崎千鶴子

新型コロナウイルスは、今までにない活動の抑制を日本全国に与えることになりました。1月にニュースで見ているときには「3月くらいには何とかなるだろう。それよりもインフルエンザ対策だ」と思っていました。ところが、先の予測のつかない事態になりました。人口の多い東京は、感染予防活動の徹底に苦慮しています。

私たちの施設も、職員に行動抑制をかけ、ひたすらウイルスが持ち込まれないように健闘の毎日です。介護職員はケアにあたる時に高齢者に接近しないわけにはいきません。この『新コロ』(ちょっと馴れ馴れしく呼んでみました)への対応は、基本的に「ノロ」や「インフル」の予防体制と変わりませんが、その緊迫度はやはり違いました。

特養では、3月1日から家族面会を禁止とし、5月末までの3か月間、外部との交流を絶っています。入居者と家族の間を取り持つ生活相談員とケアマネジャーの仕事は増えました。介護職員には、幸い濃厚接触者や感染疑い者がなく、介護力は維持しています。

そのなかで、常に「感染予防」を連呼する役目が私です。職員の自由な時間についても不要・不急の外出禁止は3か月にわたり、ストレスとなっていることは否めません。法人は、職員の頑張りを支援する手立てとして、マスクや消毒剤などの十分な必要物資を供給したり、職員には慰労の品物を支給したりして、気分を少しでも軽くして頑張れるようにしています。

緊急事態宣言が発出された頃は、施設の中でも外でも緊迫した空気でしたが、「ステイホーム週間」の頃にはゆとりがみえるようになってきています。みずべの苑の職員は、健康チェックや手洗い・消毒を習慣化させて、元気に毎日を過ごしています。その後、緊急事態宣言は解除されましたが、これからも感染源の持ち込み注意は継続され、さらに大変になるのではないかと思います。

かく言う私は、週末は確実にステイホームで、料理と家呑みで“ステイホームむっちり”になってきています。これは問題です。感染防止にまだまだ努力は続けなくてははいけません。会員のみなさまも御身大切に秋まで頑張りましょう。

## 新しい生活様式

社会福祉法人 沼風会 沼風苑指定居宅介護支援事業所(千葉県柏市)  
サービス管理責任者/主任ケアマネジャー 佐久間尚実

COVID-19が猛威を振るうなか、私の職場も御多分に漏れず感染拡大防止に取り組み、居宅介護支援事業所のケアマネジャーの仕事にも、多少なりとも影響があったといえはあった。

緊急事態宣言の前夜、「在宅系の事業所は軒並み営業自粛になるのか」とドキドキしながら柏市からの通知を待っていたが、そうはならず、いわゆる「三密」を避け、感染予防対策を講じて営業するようとのこと。

市は、ケアマネジャーの事業所へも、感染拡大防止の観点から、こんなお達しをしてきた。

①利用者宅への訪問は極力行わない。電話で利用者の様子を聞き取り、その内容をモニタリングの記録としてよい。担当者会議も電話やFAXでの照会にすること(平常時なら減算になるのに……)。その結果、これらの業務が簡略化でき、それに付随する連絡調整という煩雑な仕事はなくなった。

②介護保険の認定期間が6月30日(後に7月31日まで延

長)で終了する人は、自動的に期間を12か月延長するので、更新申請は不要。状態が変わった場合の区分変更申請は郵送で行う。

ということで、更新申請のお手伝いや、認定調査の立ち合いなど、細々とした仕事がなくなり、毎月3人のケアマネジャーが合計15件は受けていた認定調査業務もなくなった。調査1件あたり4千円の報酬で15件だから、計6万円の減収となるが、調査と特記事項作成の手間暇を考えると、6万円の減収でも(法人はどうか知らないが)私は全く痛くない。

在宅系のサービスは、新規利用者の受け入れは見合わせ、ヘルパーの訪問回数や時間の短縮はあるものの、利用者本人や家族が熱発しない限り、ほぼ通常どおりのサービス利用が可能なので、ケアマネジャーは慌ててサービスの調整に走りまわることなく、びっくりするほど空いた時間ができた。その結果、毎日5時半ぴったりに帰るという「新しい生活様式」が確立され、おまけに「テレワーク」とかいいながら、何もしない有給休暇を3日もとった。

柏市は、5月2日に39人目の感染者を確認したのを最後に、それ以降の感染者は「0」となっているが、東京都と一心同体の千葉県のため、何となくまだウダウダしている。私はというと、すっかり「新しい生活様式」に馴染み、訪問は再開されたが、この先、認定調査の依頼がきたらどうやって断ろうかと考えている。

## 会員だより

近頃、感動した「本」をご紹介します。『認知症星人じーじ「楽しむ介護」実践日誌』(海竜社)です。どうぞ皆様にもお勧めします。

著者は黒川玲子さん。そして黒川さんは、安達美登さんの友人です。その安達さんから、本に添えて下記の文章が送られてきました。安達さんのご了解をいただいて、今回の会報でご紹介します。

面白い、認知症介護について家族が書いた本ってどんな内容を想像するだろうか。介護の苦労を綴り、認知症を理解していなかったと反省を述べ、認知症を理解して正しく介護するとこんなに「認知症の人」が変わった、だからあなたも……などと、やや押しつけがましいとも思えるような内容を私は勝手に想像してしまう。

しかし、『認知症星人じーじ』はそれらを感じさせない。じーじ(認知症の父親)を介護する著者が「どうやったら、笑って解決できるか」と、じーじが投げかける難題、珍題に立ち向かう。その勇姿、じーじとの攻防に思わず、ぷっと笑い、へへへと感心する。そして認知症の親を介護する家族(←私)を明るい気持ちにしてくれる。

認知症の親のために“かくあるべき”ではなく、介護する著者自身がじーじの言動を「笑い飛ばす」ためにどうするかという、発想の転換が素敵！そして何よりも、認知星人と地球防衛軍というストーリーが秀逸だ！私も地球防衛軍入りする日は近い！

安達美登



200頁・B6判  
価格:本体1,350円+税  
発行:海竜社, 2020年5月

## 次回内部研修会のご案内

4月に予定していた「内部研修会」が、新型コロナウイルスへ

の感染防止を理由に延期せざるを得なくなったのは、皆様にお知らせしたとおりです。

緊急事態宣言の解除などにより、状況が変わりましたので、4月に予定した内容で、内部研修会を開催します。

以下は、前回の会報でお知らせした内容の再掲載です。

◆

講師の金澤さんはメイアイヘルプユウの理事で、大学教員を経て独立し、現在は中国、ミャンマーなどでも仕事をしております。当日はそのような取り組みについてもお話くださる予定です。概要は下記のとおりで、申し込み締め切りは8月20日(木)です。

記

☑日 時: 8月26日(水) 18時30分~20時

☑場 所: メイアイヘルプユウ事務所

☑講 師: 金澤 善智 氏 (株式会社バリオン・代表取締役/介護環境研究所代表CEO/医学博士)

☑テーマ: 外国人介護職を本気で育て活用する!  
「EPA」「技能実習生」「特定技能」からの一つの提言

## 編集後記

今号は、いつものメイアイ便りと少し趣を変えて皆様にお届けします。通常でしたら新津代表の「第三者評価」に関する情報記事を巻頭で提供していますが、今号は「新型コロナウイルス」の特集号としました。

緊急事態宣言が解除されたとはいえ、マスコミは「新型コロナウイルス」の報道にかなりの時間を割いています。そして、このウイルスには閉ざされた空間での濃厚接触による感染力の強さがある一方で、治療薬やワクチンの開発はこれからであること、さらに無症状で終わる不顕性感染まであり、全世界に感染が広がっていく様は、対応の困難性を示しています。様々な対策がランダムに報じられている状況は、一つの感染症として一時的な対応で終わらずに、生活の仕方そのものを変える必要性を迫っているようにも思います。

お陰様でメイアイヘルプユウの会員は全国にいます。また、専門職として様々な職場(職域)で活動しています。今号では、その会員に「新型コロナウイルス」について、職場での取り組みや家庭への影響等まで自由にお書きいただきました。時宜を得た、生きた内容の原稿をお寄せいただけたと思います。

前号(第57号)の会報では「次号をお届けできる頃には“コロナ”が収束していることを願いつつ……。」という文で編集後記を結びました。しかし、感染状況はアフリカや南アメリカにも拡大しており、そこにサバクトビバッタの大量発生と被害状況に接し、感染症と気候変動が人類に及ぼす影響を考えさせられています。

「新型コロナウイルス」に関連して、東京都内の第三者評価は、事業所訪問を7月以降にするよう評価推進機構から指示されています。そのため、評価実施の契約書は発行済みでも、事業所を訪問できないでいます。すでに日中の気温は30度を超える猛暑日が到来しています。このような猛暑の中、マスクをつけて事業所を訪問すること一抹の恐怖を感じています。熱中症により気を付けたいと思う日々です。皆様どうぞお元気で。

文責 鳥海房枝

みなさまからの  
社会福祉情報お待ちしております。(編)

メールアドレス: [smile-npo@meiai.org](mailto:smile-npo@meiai.org)

\*HPアドレス: [www.meial.org/](http://www.meial.org/)

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2  
五反田サンハイツ714  
(03)3494-9033  
NPO法人メイアイヘルプユウ